

令和4年度 第1回松本市社会福祉審議会高齢者福祉専門分科会 会議録

日 時	令和4年6月30日（木） 13時30分～15時
会 場	中央公民館（Mウィング）中会議室4-4
出席者	委員11名（欠席1名）
次 第	<p>1 開会</p> <p>2 健康福祉部長あいさつ</p> <p>3 会議事項</p> <p> (1) 協議事項</p> <p> 重層的支援体制の構築に係る多機関協働及び生活支援のあり方について</p> <p> (2) 報告事項</p> <p> ア 地域密着型サービス事業者の公募について</p> <p> イ 地域密着型サービス事業者の指定等について</p> <p>4 その他</p> <p>5 閉会</p>
会議事項	<p>3 会議事項</p> <p> (1) 協議事項</p> <p> 重層的支援体制の構築に係る多機関協働及び生活支援のあり方について、事務局から資料に基づき説明があった。</p> <p> 【質疑応答】</p> <p> ア 複雑化・複合化した困難な事例について</p> <p> 《委員》</p> <p> 複合化したケースには、虐待が絡んできていると思われる。経済的な部分が顕在化してから問題が発覚するケースが多いと感じている。</p> <p> 《委員》</p> <p> 高齢者介護の観点から、家族の誰かが司令塔になっているケースでは、その方に何かあると家族全体のバランスが崩れてしまう。日頃から状況が把握できる人が近くにいる、相談できる体制が整っていることが望ましい。ただ、あくまでも決めるのはその方々なので、自己決定が促せるような支援ができればよいと思う。最近では少子高齢化もあって、市外、県外、外国からの方々も含めて、習慣の違いや近所との関係の希薄さもあり、その支援をしている。</p> <p> 《委員》</p> <p> 住民の困りごとは年々増えていると思う。地区内では、65歳以上の高齢者</p>

は25%を超え、15歳から64歳や、それ以外の割合は徐々に減ってきている。

地区の中にどんな困り事があるか、昨年調査を行った。ゴミ出し、雪かき、庭の草取り、買い物の交通手段等の困り事が多かった。これらについて、地区でも、どんなことをしたら良いか動き始めているところ。今年の秋には、町会長、民生委員、関係組織の役職、関心を持っている住民の方にも入っていただき組織をつくり、困っている方々の希望を拾い上げながら具体的な動きをしていこうと取り組み始めている。

年々高齢化し、一人暮らしの方も増えてきていると感じている。このことは地域住民も見ている。多くの方に関わってもらわないと良くなっていかないと感じている。ただ、本当に関心のある方以外は動いてくれないというのが実態。

公民館活動や福祉ひろばの活動はずっとやってきているが、もっと身近なところで行いたいと思っている。公民館や福祉ひろばへ行ける人、出向こうという人は良いが、もっと多くの方がそこへ入り込めないといけないと思う。公民館やひろばにしても、その施設だけでやるのではなく、こちらから出向いていくことが必要ではないかと思っている。一方で、出前のひろば事業を増やしたくてもスタッフが足りず、職員も精一杯で、これ以上は難しいとも思う。

《委員》

事前検討シートを確認したが、今のところハローワークにはこのような相談は来ていない。ただ、相談に来るということは、一つの行動が起こせるということ。生活が何らかの形で困窮していて、相談に行けない状況にあるという方もいると思う。そこを支援する体制が取れたら良いと思う。

コロナの影響を受けて、高齢者、とりわけ65歳以上の離職される方が目立ってきた。会社は継続雇用に向けて、働き世代の方々を継続していく中で、高齢者は定年や期間満了を迎えると、仕事が繁忙でない限りはそこで終わってしまう。新しい仕事を希望しても、なかなか求人が追い付いていないことが現状にある。高齢者で、就業を希望しているにも関わらず自宅等にいるケースもこれから出てくると思うので、こういった検討内容はこれからもっと聞かれていくようになるのではないかと思う。

《委員長》

5年前に、ある松本の団地町会で、ニーズの調査をした。例えば、高齢者で、疾病を持っていて、外国由来で、交通困難だというような、生活のニーズが4分野にわたっていて、まさしく一人の方が抱えている複合化、複雑化の問題があった。300人程にアンケートを取って、一人当たりの平均が2.84分野、約3つ。例えば「高齢化・病気・交通困難」という問題を同時に抱えているという結果があった。一つのエリアのみのアンケート調査なので全体的な傾向ではないが、分野を5つ以上超えたニーズを抱えている件数は14件あり、

確実に複合的なニーズを抱えているケースがあった。

イ どういった支援や連携が必要だと思われるか

《委員》

松本市と長野県弁護士会は、すでに包括関係の連携事業で、市内に所在するすべての包括支援センターに担当弁護士がついて相談できる体制になっている。また、障がい福祉課とも一昨年くらいから連携事業を始めていて、4ブロックにおいて、担当弁護士に相談できる体制になっている。話を聞く中で、まさに先ほど例に上がっている「高齢者と障がい者」の問題で、実際に相談を受けることが多くなっているが、現実的には、弁護士一人が入ってすべて解決することが叶わない状況。定期的な会議等を行って、少しでも進めることができれば良いと思う。松本市においては、既にこのような体制がかなり整っているうえで、さらにこの問題を取り上げるということは、そのさらに上のレベルを求めているということ。なかなかアイデアが思いつかないというのが正直なところ。

《委員》

「食べる」ということは、生命維持をするために最も基本的なところ。日頃「食べる」ということを支援しているが、どんなに理想的な食事について伝えても、実際に買いに行ってくれる方がいない、自身で行こうとしても身体的な機能が落ちていて買いに行くことができない、又はタクシー等経済的な問題など、様々複雑な問題を一人の人が持っている。松本市は福祉に力を入れてきていると認識しているが、まだまだ見えないところ、拾い上げられていないところがあると思う。いろいろな立場からの見解があると思うが、そこをリンクしながら、食の支援をしたいと思っている。

また、具体的にどのように進めていけば良いかと思いながら話を聞いていたが、県内の知的障がい者のお子さんを持っている親の会があり、調理実習や栄養講座を10年程学生と一緒に取り組んできた。親が先に亡くなってしまったら子供たちはどうしようという、そのために、お茶の入れ方や、掃除の仕方、基本的なことを身に付けてほしいということや、食事についても、自分で選んで何を食べていくか、お金を100円握った時に、この100円で何が買えるか、何を選ぶか、栄養になる物なのか、それともおいしくぱっと食べて済んでしまう物を買うのか、「選ぶ力をつける」という取り組みをしてきた。そういう方々から学んだことがたくさんあった。

「食べる」という基本のことを、公民館や福祉ひろばに足が向かない方たちにいかに興味を示してもらうか、そのためには出前講座なのか、地域住民の方々に、一歩踏み出せない方々をどうしたら良いかということも大きな課題になっている。

ウ 「松本らしさ」について

《委員》

先ごろ、「8050」の「50」の人たちが80歳くらいになってきて困っているというケースも増えてきているのではないかと。経済的にも、生活的にも困窮しているということがあったり、ヤングケアラーの問題は学生の中にもあり、ひとり親世帯で、障がい者の子供がいて、また、学ぶ子供もいるという、そんなことも重層的に起こってきていると思う。

工夫という点では、他の委員からもあったが、関心のある方たち以外は動いてもらえない、身近なところで動けないなど、いろいろ「はざま」の問題があるが、若くして「はざま」などところで起業しようという卒業生も出てきている。介護保険の関係で訪問介護をしていた時、その中でたくさん「はざま」な問題を見て、なんとかならないかと起業しながら地域に入っていく。そういった自助・共助・互助というような力を借りながらの「松本らしさ」でも良いのではと思う。若い力をどう中に入れていくか、お互い自分の生活が精一杯ということもあって、そんなことも良いのではないかと考えている。

《委員》

公民館活動について、私の地区は公民館活動が活発な地域だが、今は活発でもこのままこの活発な活動が続いていくのだろうか、農業をやっていた頃の集団体制の考え方に乗っかっていけば良いが、今のように勤め人が多い、若い女の人には結婚して他所に行ってしまう、男の人は転勤している。世の中の人たちの半分以上はサービス業なので、活動が「なぜ日曜日なんだ。平日の夜にしてくれ。」等、思うところもある。上手くいっているように見えているところでも、脆弱だなと感じる事はある。

《委員長》

地区担当保健師の駐在化及び多機関協働事業全体を束ねる部署を新設するということが、問題を抱える方々に十分対応できるのか、今後検討していかなければいけないと思う。

《委員》

社協では、社協独自の有償サービスを進めている。今年度から徐々に地域づくりセンターや高齢福祉課など、関係機関の人を含めて事業を進めてきている。7月からは、里山辺・寿台で先行して、島立でもやっていく。35地区全地区に広げていくこと、助け合いの有償サービスを生活支援員や地域づくりセンターを中心に、社協も関わって進めていければ良いと思っている。重層的な「松本らしい」サービスにつながれば良いと思う。

《委員》

小学校の学校医をやっているが、小学校でも不登校が増えてきている。中には元々精神的に障がいがあるのかもしれない子、低学年から不登校だとか、ク

ラス替えをきっかけに不登校になってしまうというお子さんがいる。引きこもりや不登校になってしまったら、回復にはその2～3倍の時間がかかるという話もある。そういう人たちはそれなりに焦っているが、なかなかうまくいかない。初対面の人に対する警戒感や恐怖感もある。不登校の期間が長くなってくると友人関係もあまりないなどの問題がある。小学校の場合は、ある程度担任の先生たちがフォローしてくれるが、中学校ではどの程度フォローできているのか疑問である。その子たちが中学校を卒業した後、高校に進学しているのか、高校でも不登校になって中退する人もいると思う。社会性が全くないと、何十年も経ってから、30歳、40歳になって就職する気になるか、そういうことが非常に難しい。また、初対面に対する警戒感や恐怖感があり、地域に入っていくにくいという問題がある。現在の引きこもりの方は、小学校や中学校のレベルまで遡って、支援方法を考えないといけないという気もしている。

このような試みをするとして、それをどう評価するか、社会科学的な評価は非常に難しいと思う。1年後、2年後に、この取り組みが上手くいっているのかをどう評価するのか。例えば寿命が伸びたとか、死亡率が減ったとか、分かりやすい指標がない。

《委員長》

本日は継続審議という形で協議を終えたい。本日の意見等については、いずれ答申するときに反映させていきたい。

(2) 報告事項

ア 地域密着型サービス事業者の公募について
事務局から資料に基づき説明があった。

【質疑応答】

イ 地域密着型サービス事業者の指定等について
事務局から資料に基づき説明があった。

【質疑応答】

《委員長》

他に質問意見はないか。これで議事を終了する。

その他

4 その他
なし